

草分京子さんから学ぶ教師の役割

The Role of Teachers : Learn from Kusawake Kyoko's Teaching Practice

中 妻 雅 彦*

Masahiko NAKATSUMA*

概 要

教師は、自らが目標とする教育観と学習スタイルによって、独自のスタイルを形成している。それぞれの教師に必要な姿を「Teacher」「Coach」「Facilitator」「Organizer」の4つの観点によって説明することができるⁱとされているⁱ。三重県のベテラン教師である草分京子は、子どもと協同で学習を創り、様々な困難を抱えている子ども達が学習に意欲的に取り組む教育実践を進めている。また、子ども達が作成した様々な学習成果物を表しており、草分実践の評価は高いⁱⁱ。筆者は、学生や若手教員のモデルとなる経験の豊かな教師として草分京子に注目し、数年間、授業観察と交流を行ってきた。草分学級の実践観察に参加する学生は、その実践の確かさに感銘を受け、教職に生かそうと努力しており、草分から学ぶことは多いⁱⁱⁱ。現代の複雑な子どもを取り巻く環境の困難を教育によって克服しようとする教師の姿を草分京子の実践から学ぶことができる。

キーワード：Teacher Coach Facilitator Organizer 教師

1. 教師として必要な4つの姿^{iv}

(1) 授業を担当し、教える人 = Teacher

教師を教える人 (Teacher) というのは、子どもに関わる仕事の大きな部分が、授業にあることから推察できる。もちろん、教えるという行為は、上意下達的に「教え込む」ことではない。子どもと教材、教師によって構成される共同的な行為である。その中で、授業を構成する中心的な役割を持つ教師にとって、授業を構成する教材研究と子ども研究は重要な仕事である。また、総合的な教科横断的な授業構成のできる教師が求められており、教えるという行為は授業の枠を超えて広がっている。

(2) 思考や行動のすじ道を示し、指導する人 = Coach

教師が、経験のある大人として、見通しをもって生き方や未来に対して一定の見方や方向性のアドバイスをすることは、進路指導や生活指導の中で実践されてきた。同時に、現代的な課題を学習課題とする授業などでは、子どもが適切に課題解決できるように、学習の方向性を示したり、アドバイスしたりする役割も、教師に必要なになっている。子どもの思考を重視した考える授業、討論授業、学生授業などが広がっており、

子どもが自ら答えが出せるように指導、援助する行為が必要となっている。これらの行為では、教師は、「指導する人 (Coach)」である。

(3) 子どもを支え、援助する人 = Facilitator

子どもの生活の困難さは、経済や家庭環境などの様々な原因によるが、そのことによって、学習が困難にならないようする営みを、教師は続けてきた。さらに、人間関係やコミュニケーションの問題、発達の問題による子どもの困難さを支える仕事は、教師の肩にかかっている。これらの困難の解決は、学校だけでできるわけではないが、これらの困難を理解し、その中で最も力が発揮できるように支えることも、教師の役割になっている。この行為の一つが、授業の中での個別指導や学習支援として実践されてきた。子どもの生活実態を把握し、学習指導や生活指導に生かすことも求められており、教師は「援助する人 (Facilitator)」でもある。

(4) 集団を組織する人 = Organizer

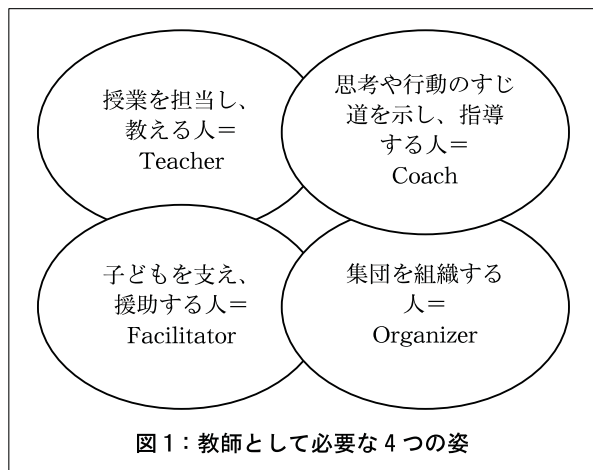
小学校1年生や中学校1年生の校種間接続による学習や生活の問題がある。これに対する教師の指導や支援の仕事が必要だが、その多くの内容は、個別指導と

* 弘前大学大学院教育学研究科

Graduate School of Education, Hirosaki University

なっているが、本来は、学習を成立させるための学習集団づくりである。学習集団づくりは、特別活動や宿泊行事等の子ども集団づくりでもある。学習集団づくりは、子どもの発達や地域の実情によって様々な要素があるが、子どもの学校生活の土台である。この学習集団によって、授業実践の中で学習意欲や興味関心が高められるように「組織する人 (Organizer)」の姿が必要である。

教師の姿をこの4つの観点で見ることで、現職の教員や教員養成課程の学生がどのように成長すべきなのかを考えることができる。もちろん、この4つの観点を全て備えている教師は多くはない。むしろ、4つの観点到り得ず、軽重を付けたりしながら、実際の指導は進んでいる。もともと、不完全な人間であり、不完全さを補い合うことが、教師の同僚性として発揮されて、教職員集団づくりが進んでいく。不完全であることを理解しながら、4つの観点到り沿って、これからの教師像を、実践的に考察する。



この研究は、数量的に積み重ねることはできない。教師の4つの姿は、一人一人の教師のおかれた立場、条件によって、表れ方も多様である。その多様な姿の中に、教師として必要な姿を考察する要素があり、一般化できる具体的な行為を明らかにしたいと考える。よって、一人の教師の行為を全面的に肯定し、そのコピーを求めることではない。

2. 草分京子学級の観察から (5年生)

草分は、現在 (2017年度)、三重県松阪市立豊地小学校に勤務している。筆者は、前任校の小野江小学校在籍時より7年前から授業見学をしている。授業見学には、教職大学院生も一緒に参加し、教員としての力

量を形成する機会となっている。また、松阪市立天白小学校勤務の頃から、研究会等で交流し、子ども達と作成した作品等をいただいている。

以下、2016年10月28日3・4時間目の5年生の授業見学をもとに、草分から教師の姿を学ぶ。

- (1) 社会科「これからの日本の食料生産」
(ア) 授業を構成する「教える人」として

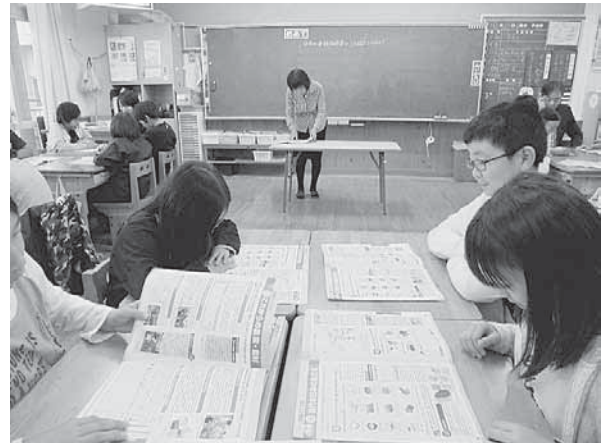


写真1：机の上のパンフレットが共通の資料



写真2：朝食、給食の実物資料

農業漁業学習のまとめ、「これからの食糧生産」の在り方を考える授業だった。草分は、この授業の内容を理解するのは難しいので、あまり深い考えを求めるとはしないと述べていた。子どもの知識の獲得や思考方法の現状を把握して、授業を構成しているので、授業展開に無理がないように配慮され、教え込みにならない学習となっている。

子どもが考えるための新たな知識は、この授業では、輸出入に関する事実や現状である。これは、副読本に掲載されている資料が共通の資料となる。事前に配布されているので、子どもたちは目を通しており、

最低限の知識を共有していると考えられる。この知識を、草分が用意した給食や朝食の材料や内容と関連付けて考えるように授業は進行した。

考える手がかりとなる給食や朝食は、草分が用意していた。知識を具体的な事実と結合して考えられるように、教材や教具が学習のねらいに即して準備されている。また、この授業では、教師による学習のまとめをしないで終了することが意図されているので、子ども達が自分の力で考えることのできる具体的な「もの」が、子どもが自分で思考するための適切な教材として選択されている。

草分は、資料の説明や給食、朝食の内容などの解説はするが、多くは、具体的な「もの」を子どもに問いかけることで、学習は進んでいく。これは、以前に参観した授業でも同様であった。教師と子ども達の間一問一答の「問いかけ一応答」の中から、学級集団で考える内容がだされ、子どもの言葉によれば、「よくわからない」「説明がうまくできない」内容が導き出されていく。この時、一人のわかっている子どもの説明によって、何となくみんなが分かったということにはならないように配慮されている。また、知識をひけらかすような発言をする子どもがいない。しかし、わからないことをそのまま放置せず、どんな発言でも、みんなに納得できるように発言することを、草分は強く求めていることが、「みんなに、わかるように言ってみて」「誰か、わかるように説明できないかな」などの発言から理解できる。

(イ) 子どもの学習を促す「指導する人」「援助する人」として

授業の机の配置は、授業の内容や教材提示によって、形態を変えている。この授業では、基本は、友だ



写真3：朝食の実物教材の提示



写真4：パンフレットで確認をしている

ちと一緒に考えたり、教えあったりできるように4人グループになっている。教材となっている給食や朝食の内容の説明を聞いたり、見たりする時には、椅子を持って教室の前に集まらせ、全員が確認できるようにしている。4人のグループから全員を前に集めたり、あるいは、椅子もなしで自由に交流させたりする授業は、今までの授業観察でも多くの場面で活用されていて、草分の授業が必要に応じて、様々な形態をとっていることがわかる。一齐に前を向いて聞きあう、グループで話したり考えたりする、自由に席を立て調べたり交流したりするという授業内容に応じた授業形態の臨機応変さは、草分が計画的に変化をつけているのか、あるいは、その時々々の学習の雰囲気を読んで即応しているのかは定かではないが、子どもの側から考えると、学習参加をするための適切な形態となっていることは確かである。それは、子どもの学習への楽しい参加や集中から確認できる。

(ウ) 授業を「組織する人」として



写真5：見えなければ、立っていてもいい

子どもたちは、教材の説明が終わって、考えるための材料（知識）を得た後に、4人のグループ毎に、「これからの食糧自給をどうするのか」をノートにまとめ、それに基づいて意見交流をした。グループ毎の意見交流には、参観した私を含めた教員、大学生がすべての班に入り、「大人」の見解も含めて考えることになった。

グループでの子どもの意見は、自給率をあげるための方法や価格などについての発表だった。配置された「大人」は、それぞれの意見に理由を求めたり、自分の考えで補強したりしていた。草分の授業観察では、観察者は、必ず授業参加者として活用される。訪問日はわかっているので、意図していることではあろうが、学習に応じて参加の方法は違い、子どもの思考を補助したり、思考の方法を示したりする役割が与えられる。観察者がいない時に、どのような方法をとっているのかを知りたいところだが、その時間に適した参加の方法を取り入れることができるのは、草分が、子どもの現状に合わせて適切に学習を組織していることの表れだろう。



写真6：考える場面では、4人グループに

授業の最後の場面は、子どもたちのまとめの意見に同意しつつ、子どもの意見を尊重し、「これからもよく考えよう」と語りかけて、終了した。授業内容の知識的なまとめはなかった。オープンエンドであった。この学習は、もともと難しいと草分は言う。難しいことを無理にまとめても理解できないから、わかりきったまとめがなくても、自分で考えていれば、後でわかってくると言う。

草分の授業の特徴の一つは、このオープンエンドにある。もちろん、算数では、数のきまりや考え方をノートにまとめたり、子どもたちの大方の合意を板書したりすることは当然のこととして行われているが、

多様な意見がある場合や同じような意見でも多少の違いがあったり、子どもが「ちょっと違っている」と感じたりしている場合は、子どもの意見を一つに集約して、他の子どもの意見を切り捨ててしまうようなことをしない。あくまでも、子どもの意見の尊重、子どもの声を聞きながら学習を組織している。そして、多少の違いを子どもが吟味するように授業を進めている。よって、学習は当然、オープンエンドになることが多いし、意見の集約ができない時には次の時間の課題として残すことも多い。次の課題として時間を送ることによって、子ども達は、より深く考えて、次の時間を迎える。そこに、学級通信が活用されてもいることもある。

(2) 国語「大造じいさんとガン」

(ア) 子どもの学習を促す「指導する人」「援助する人」として



写真7：学級通信を読みあう

草分学級では、学級通信は、掲載された内容に応じて、必要な学習の時間に読み合う。この日は、国語の教材である「大造じいさんとガン」の読み取りと感想が載せられていた。前時の学習に関わる内容だが、それを書いた子どもが指名されて、学級通信の該当箇所を読んだ。他の子どもたちは、それを聞きながら、目で追っていた。

草分学級では、学級通信は、必ずみんなで読む。それが当たり前でないのと草分は言うが、これは当たり前ではない。草分の学級通信は、学習の経過報告であり、まとめであり、導入でもある。現在進行している学習につながる友だちや自分の意見が載っているから、子どもたちは真剣に読む。そして考える。考える学習が「主体的・対話的で深い学び」と言われているが、子ども達が考えるための種を蒔くのは教師の仕事

であり、学習を支えることである。学級通信にも、考える種は詰まっている。



写真8：草分の範読

その後、本時の学習内容になる段落を、草分が範読した。特に、感情を入れるわけでもなく、かといって、棒読みでもない。落ち着いた声で、しっとりとした範読だった。聞いている子どもたちも、しっとりとした雰囲気の中で、聞き取っていた。草分の範読は、いつ参観しても同じで、この雰囲気はいいなあと感じている。そして、子どもは聞き入っている。学習に参加する準備、心構えがつけられているのだろうと思う。

黒板には、前時の学習でまとめたのだろう「うなぎつりばり作戦」と書かれた模造紙が掲示されていて、子ども達が本時の学習を進めるための学習のガイドとなっている。

範読が終わって、草分が、「どんな作戦ですか」と問い、子どもたちの発言が始まった（第一発言者）。「タニシをエサ」に「ウナギの釣り針で捕まえよう」とする作戦であったことが、それぞれの言葉で次々と



写真9：この授業の第一発言者

発言された。もちろん、一人の子どもがすらすらと内容を発言したのではない。教科書の内容に沿って、ある子は作戦の部分を、別の子は作戦全体を発言した。こうした子どもたちの発言で学習が進行する場面では、子どもたちの相互指名で学習は進む。



写真10：板書はあまり多くない

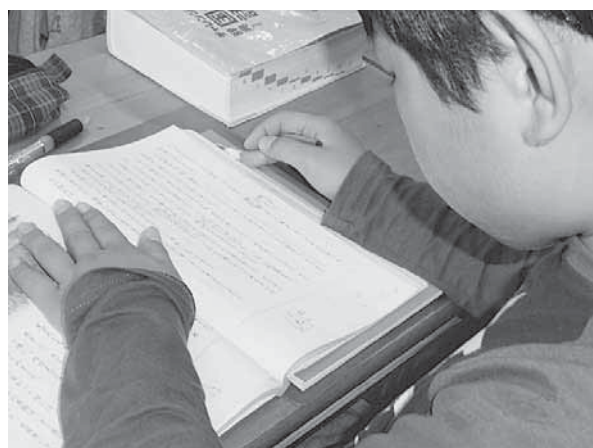


写真11：教科書にメモをする

相互指名で次に発言する友だちを誰にあてるのかは、子ども同士が考え、配慮していると草分は言う。お互いに学習理解の状況をつかみ、家庭の状況まで知っているので、様々な配慮をして指名すると言う。以前、観察した学級にあまり声を出さない子どもがいて、その子に発言させようと他の子ども達が手を交え、品を変え努力している様子を見た時には大変驚いたが、こうした配慮ができる子どもたちに育っていることが、「コーチ」「支援者」として教師の姿であろう。本時の授業でも、ある子は、じっと考えているようで発言のきっかけがつかめないようだった。すると、相互指名の時に、前の発言者の発言中に、すっと頭をあげ、目が合い、指名され発言した。友だち同士の相互作用によって発言が促されていた。「学び合い」

学習が広がっているが、子ども同士のつながりで学び合う姿とは、こうした場面だろうと感じる。

(イ) 授業を構成する「教える人」として

子ども達の相互指名による途切れない発言が続いたが、草分は子どもの発言にあった「おもわぬごちそう」という言葉で発言を止めた。そして、「おもわぬごちそう作戦」と板書し、「これはどんな作戦なの」と質問した。子どもたちからはいくつも発言があったが、草分は、発言した子どもの言葉の中からキーワードになるであろう「1よりたくさん」「じゅう わなをつかっていない」「たくさん」「何日も」「夏のうちから」「しかけ 小屋」という言葉を板書していった。子どもたちは、板書を写すわけではない。友達や草分の発言を聞きながら、教科書に自分の気づきや友達の発言の意味をメモしている。イラストのように描いている子どももいる。

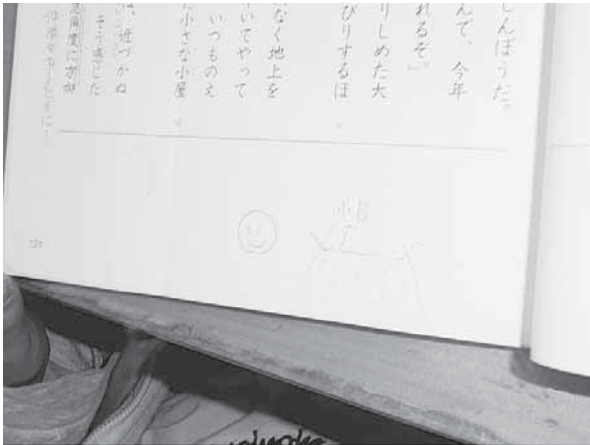


写真12：イラスト風の書き込み

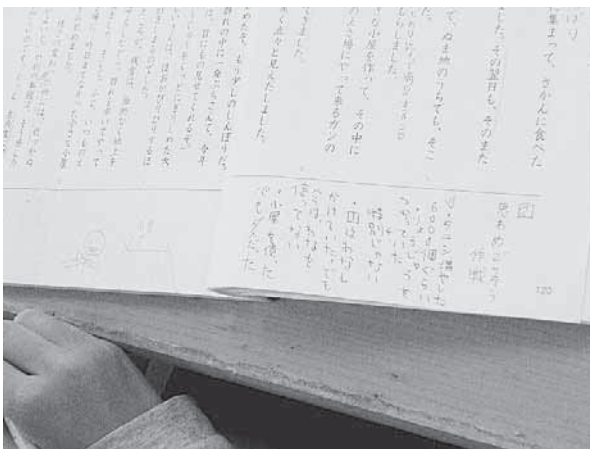


写真13：聞きながらの欄外メモ

「うなぎつりばりさくせん」と一緒に書かれて掲示されている子どもたちの言葉が、「大造じいさんとガ

ン」を通して考えるためのヒントである。「大造じいさん がんばったなあ」「大造じいさんの気持ち」「その時の景色」の観点で、子どもたちの発言がさらに続いた。

前時からの学習のガイドであるヒントを使って考え、発言するので、子ども同士の発言の方向が定まり、発言がかみ合うので、論争的な発言内容ではないが、友だちの発言への付け加え、言い換えなどが多く、学習の理解が深まっていることを感じることができる。

草分は、キーワードの板書だけで聞き役になっていたが、最後に「ううん」と板書し、「うなってしまうました」と付け加えた。この言葉も、子どもの発言にあった言葉を拾っている。

「ううん うなってしまうました」とはどういうことなのかと問いかけ、子ども達から応答があり、大造じいさんの気持ちを考える場面となった。子どもたちは、ノートに大造じいさんの気持ちを書き、草分は、机間指導をしながら、朱書き指導を入れていく。社会科でも同様だったが、自分の考えはまずノートに書かせてから交流や発言にしている。

この机間指導中、草分は、ノートを見ながら、いろいろと話しかけて、なぜそう考えているのかを聞き取ろうとしていた。

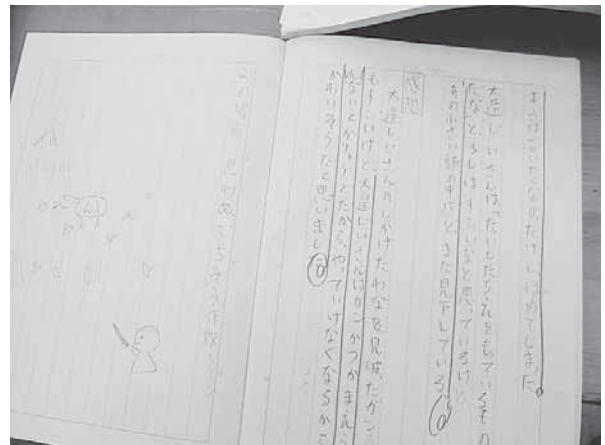


写真14：子どものノート：机間指導中の朱書き指導

「ううん うなってしまうました」とはどういうことなのかという最後の問に対して、何人かの子どもが意見を言い、授業は終了した。ここでも、草分は、「そうやね」と言いながら、聞き役であり、子どもの発言を肯定的に受け止めている。子どもの発言をまとめてしまうことはない。オープンエンドの授業だった。



写真15：子ども達のノートは個性的



写真16：まとめの発言

3. 草分京子の授業に見る教師の役割

(1) 教師の「対話性」と子どもの把握

授業でも、給食や清掃などの時間でも、草分の子どもへの声かけには無理がなし、「上から」の押し付けを感じることがない。もちろん、「こうせなあかんよ」と指導する場面は多く見てきたが、指導の前に、必ず、子どもの意見、言いたいことを聞くことによって、子どもを尊重し、一呼吸おいているように見える。この一呼吸によって、草分の指導や指示は、子どもが納得のできる内容となって、理解されるのであろう。ここに、子どもの意見や声を聞く「対話性」を見ることができる。当たり前のことのようにだが、聞くこと、聞こうとする姿勢は教師が、学級集団の中で役割を果たすために必要な条件である。聞くことによって、子どもを把握し、子どもに理解される教師となる。教師の「対話性」は、子ども理解を進めるだけでなく、子どもの教師理解も広げている。

(2) 「見通し」と「即応性」

草分学級の子どもの学習意欲や興味関心は大変よく育っている。どの教科でも意見交換が活発に行われ、友だちへの配慮や手助けもよくできている。子どもの成長を促しているのは、草分の学習に対する「見通し」の持たせ方や「こうすれば、こうなる」という「見通し」が持てる指導にある。これによって、自力解決の場面、協同的な学習場面などにおける自分の役割や他の子どもへの対応などが身につけているのである。教師が、学習に対する「見通し」を持つことが、子ども達にも広がっている。

草分学級の授業見学では、指導案を見せてもらったことはないが、授業の大きな流れは計画的に進行している。実際、授業中に、いくつもの場面で当初の計画にはなかったと思われる修正が行われることがあった。授業の中での教師の「即応性」である。子どもの学習状況に応じて、授業の軌道を修正し、子どもの学習をより深化させたり、考えさせたりしている。これはする行為でもある。これは、子どもの状況に応じて修正するいくつもの引き出しを持っていないとできないことではあるが、その引き出しをつくるために、草分が、学校、地域、教材研究などに努力している姿を学ぶことができる。

(3) 教材研究の確かさと発達に応じた教材化（探究的な教師像）

草分の学校、地域、教材研究などに努力している姿の中でも、教材研究の確かさと教材化を特筆することができる。天白小学校での「ぞうれっしゃ」の掘り起こし^v、小野江小学校での松浦武四郎とアイヌ文化^{vi}や津空襲の掘り起こし^{vii}、豊地小学校の青い目の人形の教材化^{viii}や地域調査^{ix}など、地域における教材の掘り起こしと教材化は、それぞれが子どもの学習として結実し、様々な発表や作品となって成果をあげている。これらの学習成果の背景には、草分が、地域の様々な人々と繋がりを持ち、支えている姿がある。例えば、地域の「縄文まつり」「武四郎まつり」などへの関わりである。これらに子ども達が参加する場面をつくったり、ゲストティーチャーと子どもと一緒に学んだりする姿を見せることによって、地域における教材研究の楽しさを子ども達にも伝えている。こうした草分の教材や地域での取り組みからは、探究的な教師としての姿を学ぶことができる。

(4) 体験的活動的学習を価値ある学習に

6年生「速さ」の学習で、プラレールの機関車トーマスと新幹線を使った学習や大塩の乱を津藩の儒学者の碑で学ぶ学習などを見学した。これらの学習では、子ども達の体験的で、活動的な学習の場面を見ることができた。子ども達の学習活動は、速さの意味と計算方法、碑によって得られる情報という学習の価値に、体験的活動的な学習によって近づくことができていた。ただ活動しているのではなく、一つ一つの活動によって得られた情報が、学習の価値につながっていることが実感できる学習となっていた。だから、子ども達は、意欲的に活動するし、発見した情報を共有し、協同して新たな価値を見出そうとしていた。こうした草分の授業からは、体験的活動的な学習として取り上げる学習活動や教材の質が問われていることを学ぶことができる。

(5) 生活を学習へ、学習を生活へ

教材研究でもわかるように、草分が社会科、総合的な学習等の授業で取り上げる教材の多くは、地域教材である。勤務校は小規模校で、学級規模も大きくはない。さらに、(1)で述べたように子どもの把握が確かであるので、子どもの生活感覚や地域教材に根ざした学習に取り組むことができています。例えば、前述した6年「速さ」の学習では、身近なプラレールを使った測定から秒速、分速を導き出す授業となり、「大造じいさんとガン」の学習では、子どもが家庭学習として読み込んできた教材文の感想から授業が展開していた。生活における経験知、学校が働きかけた家庭学習などの生活知が、学習によって学校知として練り上げられ、獲得した学校知を生活、家庭に返すという学習の循環となっている。それを有効につなぐのが、学級通信である。生活を学習へ、学習を生活へという学習の循環を支えているのが学級通信と言えよう。

4. 草分京子から学ぶ教師像

教師として必要な4つの姿を再掲する。

- (1) 授業を担当し、教える人 = Teacher
- (2) 思考や行動のすじ道を示し、指導する人 = Coach
- (3) 子どもを支え、援助する人 = Facilitator
- (4) 集団を組織する人 = Organizer

草分から学ぶ教師の姿はどのようなものだろうか。

- (1) 教える人としての草分は、教材研究の確かさ、

子どもに応じた教材化の視点や学習の「見通し」も持ち方やより理解を進める「即応性」などで確認することができる。こうした姿が、体験的活動的な学習に学習する価値をもたらしている。

(2) 思考や行動のすじ道を示し、指導する人としては、「対話性」と子どもの把握によって優れた姿となっている。特に、子どもの言葉、発言に対する肯定的な受け止めは、子どもの思考を促し、学習の深化となっている。

(3) 子どもを支え、援助する人としても、子どもの把握によって、個別指導によって一人一人を支えることを可能にしている。ここでも、子どもの把握が土台にあり、子ども達の相互指名での配慮など、学級に広がっていることが特徴となっている。

(4) 集団を組織する人としてはどうだろうか。子どもの学習成果物、お祭りや行事などへの子どもの参加を進める人として姿を発揮しているが、それを可能にしているのは、学習集団としての学級経営であり、生活と学習をつなぐ草分の姿となっている。

以上のように、草分の授業実践と学級観察を通して、教師として必要な4つの姿の具体的な表れをまとめることができる。教師のあるべき姿を、「教育に対する熱意と使命感をもつ教師」「豊かな人間性と思いやりのある教師」「子供のよさや可能性を引き出し伸ばすことができる教師」「組織人としての責任感、協調性を有し、互いに高め合う教師」と規定していることが多い⁸。こうしたあるべき教員像は、当然のことのようにわかっていると語られているが、実のところ、具体的には語られず、精神論的な内容記述となっている。これは、教師像の内容説明を読むと「意欲」「使命」などの心情が優先されていることによって明らかである。精神論の「意欲」「使命」では、実際の授業や生活指導を実践することはできない。

子どもへの指導支援は、授業や学校生活に即して、それぞれの場面でどのような教師の姿として表れるかが大切であり、一つ一つの授業の事実に基づいて学習することが必要である。本稿で取り上げた草分京子の授業から学ぶことのできる4つの姿の具体的な表れは、授業実践からとらえることのできる教師の姿であり、学校で授業研究を進める教師、教師を目指す学生の指針となる。

文献

- ⁱ 汐見稔幸「総論〈新たな教師像〉を求めて」(『これからの小学校教師』大月書店、1997)
- ⁱⁱ 草分京子の実践記録には、「小学校の歴史の授業づくり—子どもたちに寄り添い未来を切り開く歴史学習」(『歴史理知教育』No852、2016年7月、歴史教育者協議会)、「学校給食は地域と学校をつなぐ教材の宝庫」(『食農教育』No.54、2007年4月、農山漁村文化協会)、「『海の命』父を乗り越え成長する太一の姿を読み合う子たち」(『語り合う文学教育』第11号、語り合う文学教育の会・三重)などがある。また、草分の教育実践は、久保田貢「教師『草分京子』についての研究—その総合的な実践と、教師としての力量形成」(愛知県立大学文学部論集児童教育学科編(53)、pp. 71-93、2004、愛知県立大学文学部)等に取り上げられている。
- ⁱⁱⁱ 愛知教育大学教職大学院院生、京都橘大学、三重大学教育学部の学生等が、学級訪問し、授業実践に学び、子どもとの交流をしている。
- ^{iv} 「教師として必要な4つの姿」は、汐見(1997)を参考に筆者が、「『緩やかなつながり、絆:』で育つ教師—『教師の希望学』の可能性—」(愛知教育大学研究報告第62輯(教育科学編)、2013、pp. 167~ pp. 174)『『考える』社会科を進める教師—『教師の希望学』と『緩やかなつながり』によって—』(『愛知教育大学教職大学院院生「考える」社会科の授業』中妻雅彦編著、2016、同時代社)に若手教員の調査等を基に発表した。
- ^v 『天白から走った「ぞう列車」』(松阪市立天白小学校 昭和20年度卒業生作、2009年3月)
- ^{vi} 『版画・松浦武四郎』(平成22年度松阪市立小野江小学校5年生制作、平成23年3月)、『小野江しょうかいマップ』(松阪市立小野江小学校、制作:平成24年度小野江学校6年生、平成25年3月)
- ^{vii} 『桃とトマト—女学生が見た津空襲—』(原画:岩井久子 絵の補足:平成24年度小野江小学校6年生児童、津空襲を記録する会・津平和のための戦争展実行委員会発行、2014年1月)
- ^{viii} 『グレースちゃん物語』(松阪市立豊地小学校平成28年度児童177名)
- ^{ix} 『中村川流域わくわくマップ』(豊地まちづくり協議会・豊地公民館・豊地小学校製作、2016年11月)
- ^x 「小学校教諭教職課程 カリキュラムについて」(平成22年10月 東京都教育委員会)による。
(2017. 8. 8 受理)